

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2722 号 2015.11.16 発行

### 被災者、進まぬ心の復興 精神状態「悪化」「変わらず」が6割 東日本大震災5年

朝日新聞 2015年11月16日

東日本大震災の被災者の「心の復興」が進んでいない。震災から4年8カ月がたった今も仮設住宅での生活を余儀なくされ、将来の展望が開けない。心の健康が悪化している場合も少なくない。医療や行政だけでは対応しきれず、地域のコミュニティーでの支え合いが欠かせない。



■ 避難いつまで…募る不安に涙

仮設住宅で被災者の話に耳を傾ける岩手大の麦倉哲教授(左)。被災者を定期的に訪れ、調査とともに見守りを続けている=岩手県大槌町

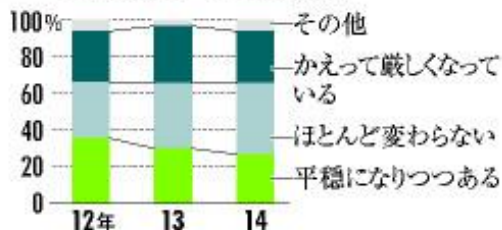
「どうして生きながらえてしまったんでしょう。あの時なんで逃げたんだろうって……」。岩手県大槌町の仮設住宅で、女性(78)は突然声を詰まらせ、目元を手でぬぐった。

海の近くにあった自宅は震災による津波で流された。友人や近所の人が大勢亡くなった。仮設住宅ではずっとひとり暮らしだ。この暮らしがいつまで続くのかと思うと不安で眠れず、医師から処方された睡眠薬が手放せない。時間が経つほど気分の落ち込みがひどくなっていると感じる。

町は津波で壊滅的な打撃を受け、人口の1割近い1200人余りが犠牲になった。現在も約3300人がプレハブの仮設住宅で暮らす。町内に住む長男は「家を再建したら一緒に住もう」と誘ってくれる。だが、長男の家族に気を使わせるのではと思うと喜べない。当初の予定ならとくに造成されているはずの再建予定地は雑草が生え、野ざらしになっている。

別の仮設住宅でひとり暮らしの漁師の男性(60)も、言いようのない不安に襲われる。ウイスキーの空き瓶が数本、部屋にころがる。津波で亡くした家族のこと、借金をして再開した漁

#### 岩手県 大槌町の仮設住宅入居被災者の心の変化 岩手大による



#### 宮城県 被災市町の仮設住居入居被災者の健康調査 14年。宮城県による



#### 福島県 こころの健康度・生活習慣に関する調査 14年。福島県立医大による



や養殖がうまくいかないことなどがぐるぐると頭の中をめぐる。「死んだ方がましと思う自分が恐ろしい」

岩手大学の麦倉哲教授らの研究グループは大槌町の仮設住宅に住む、被災者3千人を対象に調査を毎年続けている。2014年に気持ちの変化を尋ねたところ、「かえって厳しくなった」と答えた人が28・4%を占めた。「震災直後からほとんど変わらない」と答えた38・7%を合わせ、6割強が精神状態が改善していなかった。

家族との死別、長引く避難生活で将来の見通しが立たず、精神的に追い詰められている被災者は多い。内閣府自殺対策推進室によると、被災3県での震災関連の自殺者は今年9月末までの累計で151人に上る。

宮城県石巻市の市立病院開成仮診療所。今も2500人以上が暮らす市内最大の仮設団地に隣接する。12年5月から患者に接してきた医師の長（ちょう）純一所長は、これまで、うつ病やうつ状態と診断した患者は約250人、心的外傷後ストレス障害（PTSD）と診断した患者は約60人に上る。

長さんは「全体の1割近い人が重い精神的な障害の傾向があるのは、被災地以外では考えられない高さだ」と指摘する。うつ病などを抱える被災者の多くが最初は風邪などの体調不良を訴える場合が多いことに着目する。かかりつけの医師や仮設住宅を巡回する保健師らが不眠や食欲不振に気づけば、悪化する前に対処できる場合もあると訴える。

#### 災害から子どもを守る取り組み 看護研修会で紹介 明石 神戸新聞 2015年11月15日



災害時のより良い看護について学んだ研修会＝北王子町

病気や障害のある子どもを災害から守るため、看護のあり方を考える研修会が15日、県立大学看護学部（兵庫県明石市北王子町）で開かれた。関西などの看護師や施設職員ら約70人が参加し、安全を確保するための備えや先駆的な取り組みを学んだ。

研修会は日本小児看護学会災害対策委員会が毎年開いており、阪神・淡路大震災20年に合わせ同大学が会場となった。

重症の障害児が入所する神戸市内の施設職員は、子どもや家族にも災害に備える意識を持ってもらうため、呼吸器の使用者が避難訓練に参加する試みを紹介。参加者の関心は高く、具体的な手法などが質問された。

研修会の開催を主導した同学部の三宅一代准教授は「保育所などからも『取り組みを始めたい』という声が寄せられており、手応えを感じている」と話した。（新開真理）

#### 自分の意思で避難できる施設を 子どもシェルター研修会



沖縄タイムス 2015年11月16日  
研修会で子どもシェルターの必要性を説明する横江弁護士＝15日午後、那覇市・沖縄弁護士会館

虐待を受けるなど、安心して生活できる場所を失った子どもの一時避難先として、来春開設予定の「子どもシェルター」のボランティア研修が15日、那覇市の沖縄弁護士会館で始まった。「基礎講座」として、専門家3人が開設の意義などを語り、児童福祉関係者ら約70人が聴き入った。同会弁護士らが中心の任意団体「子どもシェルターおきなわ」の主催。

団体理事長で弁護士の横江崇さん（38）＝那覇市＝は正職員3人とボランティアで、定員5、6人のシェルター開設を目指すと説明。最初は主に中学卒業から20歳未満の女

子を対象に、入所後は2カ月間をめどに支援する計画だとした。

沖大名誉教授の加藤彰彦さん（73）＝横浜市＝は県内の貧困は全国最悪レベルで、非行少年の再犯率も全国的に高いと説明。「親世代の経済的余裕がなくなり、生活のストレスが子どもに向けられるケースが多い」と貧困と少年非行の関係を指摘し、「子どもが貧困や親の虐待に悩む場合、自分の意思で避難できるシェルターのような施設が必要だ」と強調した。

社会福祉士の海野高志さん（36）＝浦添市＝は「避難する子どもを24時間体制で支援する必要があり、スタッフの充実が欠かせない。正職員3人では足りない」と訴えた。

会場からは「支援期間のめどは、なぜ2カ月か」「地域の民生委員や保護司との連携が必要だ」などの質問が飛び交った。

「子どもシェルターおきなわ」は年内に4回の講座を予定しており、引き続き受講生を募集している。

今回は12月1日午後7時、同会館で「思春期にある子どもの心理」を開く。講師は琉大病院の精神科医島袋盛洋さん。受講料は千円、問い合わせは電話098（836）6363。

## 常総VC、生活支援に軸足 きょう「支えあいセンター」に移行

産経新聞 2015年11月16日

常総市災害ボランティアセンター（VC）は16日から「地域支えあいセンター」に移行し、被災者の生活支援に軸足を移す。

鬼怒川の堤防決壊から2カ月以上が過ぎた今、被災した家屋の泥出しや清掃などが終息に向かい、ニーズが変わりつつあるためだ。今後は、在宅避難者をはじめとする要支援者に対し戸別訪問を行い、ニーズを把握した上で、生活相談や情報提供、地域づくりの支援などを行う。

もっとも、ボランティアの受け入れや活動内容の調整は続ける。登録制にして、依頼に応じて対応するという。

市災害VCを運営している市社会福祉協議会（市社協）の滝本栄事務局長は「被災してコミュニティーが崩れている地域もある。支援に見落としがないようにしたい」としている。

市災害VCは9月13日に開設。これまで延べ3万人超のボランティアを受け入れ、5千件以上の依頼に対応してきた。

## 〈絵実梨（えみり） 母になって〉（上） 障害があっても 流産への不安・・・「でも、絶対産む」

中日新聞 2015年11月11日



夫の成木健司さん（左）に支えられながら、母への手紙を読む絵実梨さん＝岐阜県各務原市で

「お母さん。双子で、障害がある私たちを育てるのは、大変だったと思います。私も出産して、親はこんなに子どもが心配なんだと、ようやく分かりました」

9月下旬、岐阜県各務原市の結婚式場。披露宴の最後に、同県関市の成木絵実梨（なるきえみり）さん（20）は、夫の健司さん（30）に支えられて、母の菅田（すがだ）美弥子さん（46）に宛てた手紙を読み上げた。美弥子さんを驚かせたくて、絵実梨さんが秘密で準備していた手紙だ。

傍らには、8カ月になった絵実梨さんの長女、結愛菜（あいな）



ちゃん。孫娘の晴れ姿に、ずっと一緒に暮らしてきた祖母の菅田由美子さん（63）の目に、涙があふれた。

絵実梨さんと、双子の姉の采花（あやか）さんは脳性まひで生まれた。左足が不自由な絵実梨さんは、子どものころからこつこつ続けたリハビリで歩けるようになったが、重い物を持ったり赤ちゃんを抱いたりして歩くのは難しい。

紺色のドレスは、裾を踏んで転ばないように、気に入った物を短く切ってもらった。足元からは、愛用している黒いスニーカーがのぞく。それでも長時間立っているのはつらく、たびたび健司さんに寄り掛かって披露宴を乗り切った。

絵実梨さんが、会社員の健司さんと知り合ったのは、特別支援学校高等部を卒業して、NPO法人で事務の仕事をしている時。デートでテーマパークに出掛けた時、車いすを優しく押してくれ、心引かれた。付き合い始めて間もない2013年秋、実家のそばにアパートを借り、2人で暮らし始めた。

以前から子どもが大好きで、「いつか自分の子どもを」と望んでいた。昨年2月、双子の妊娠が分かった。「びっくりして冷や汗をかいたけれど、喜んだ」と健司さん。絵実梨さんも「すごくうれしかった」。

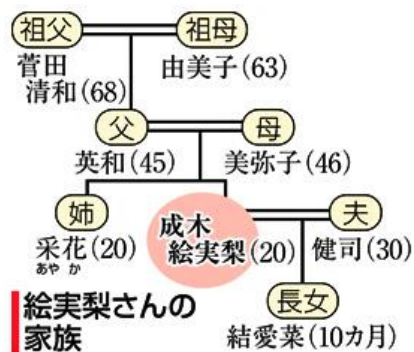
でも、家族の反応は違った。「学校を卒業したばかりだし、まだ早い。無理だと思う」。美弥子さんはきっぱり伝えた。「絵実梨の体が不自由なことが、一番大変。赤ちゃんが10月10日おなかにいられるかも分からないし、その体で育てられるのか」と、娘や孫を心配した。

しかし、このときはごく初期で流産してしまう。「私がこの体じゃなかったら、その子たちはいま、ここにおったかもしれん」と、絵実梨さんは自分を責めた。手術の時、涙が止めどなく流れた。

再び妊娠したことが分かったのは昨年6月。美弥子さんたちから「妊娠は、結婚式をしてから」とくぎを刺されたところだった。絵実梨さん自身、「また流産するかも・・・」と不安でいっぱい。健司さんもうれしい半面、「絵実梨が一人ですべてのことをやるのは厳しい」と感じていた。「フォローしてくれている家族が前向きではないのに、大丈夫かな」

でも、絵実梨さんの意思は固かった。「絶対に産む」。アパートを引き払い、実家で同居することにした。

障害があっても、子どもを産み育てたい。左足が不自由な成木絵実梨さんの出産と子育てを追った。（稲熊美樹）



〈絵実梨（えみり） 母になって〉 (中) 「なぜ、こんな体…」 出産で消えた恨み



中日新聞 2015年11月12日  
娘をベビーカーに乗せ、家族で買い物をする成木絵実梨さん（左）と健司さん＝岐阜県各務原市のショッピングセンターで  
脳性まひで、左足が不自由な岐阜県関市の成木絵実梨（なるきえみり）さん（20）は、病院のベッドで、ただじっと祈り続けた。「私が生まれたときの体重756グラムを超えて、無事に生まれて」  
妊娠を告げられた喜びもつかの間、健診で切迫早産と診断されたのだ。「私と同じように、障害があったり、何かの病気だったらどうしよう」。絶対安静で、トイレにも行けない3カ月。不安でおしつぶされそうだった。

今年1月5日、2250グラムで長女、結愛菜（あいな）ちゃんを無事出産。翌日、保育器の中の結愛菜ちゃんに初めて対面し、静かな寝顔にじっと見入った。でも今度は「保育器からいつ出られるの」と心配でたまらなくなった。結果的に3日で出られたが「ああ、お母さんは、これが半年も続いたんだ」。気付いて、はっとした。

未熟児で生まれた絵実梨さんと双子の姉、采花（あやか）さん（20）は、半年間を保育器の中で過ごした。「お母さんは、ようここまでやってくれたなあ」。じーんと胸に来た。

それまで、母の菅田（すがた）美弥子さん（46）への思いは正反対だった。小学4年生のころ、自分の障害が理解できるようになると、「なぜ、私はこんな体なの」と母を責めた。

気持ちが一番荒れていたのは中学1年のとき。采花さんとともに地元の小学校に通ったが、将来就職するための訓練を十分に受けようと、中学からは特別支援学校に進学し、学校環境が大きく変わった。学校を選んだのは、絵実梨さん自身だったが、級友ががらりと変わったことに戸惑った。特別支援学校には、自分より障害の重い子が多かった。

「毎日、死にたくて死にたくて」。これから生きていても、楽しいことはないやろなど、包丁の先で右ひざを突いたこともあった。今でも、その傷痕は残っている。

今も「普通の体に産んでほしかった」という思いは確かにある。動き回る結愛菜ちゃんを追い掛けられない。この先どうやって育てていけばいいか、不安もある。けれど、出産を機に、母への気持ちは変わった。「誰も恨めないし、恨んでも何も変わらない」。そう考えられるようになった。

母に感謝する気持ちもわいてきた。何でも他の子と同じようにできるようにと、厳しく育ててくれたこと。地元の小学校に入れるよう、教育委員会に掛け合ってくれたこと。絵実梨さんは、小学生の時の友人と付き合いが続いており、自分の赤ちゃんと一緒に遊びに来てくれる子もいる。それは、母が地元の小学校に入れてくれたから。

「そんな気持ちになれたのは、この結愛菜が生まれてきてくれたおかげ」

美弥子さんは娘の妊娠を手放しで喜べなかった。でも結愛菜ちゃんが生まれ、娘が変わったと感じる。

「結愛菜と一緒にじゃないと、絵実梨は成長していかなかった。この人のために何かしてあげたいと思わないと、人って何もできないんだと痛感しました」（稲熊美樹）

## 〈絵実梨（えみり） 母になって〉 （下） 歩きだす娘 周りから支え「何とかなる」

中日新聞 2015年11月13日

結愛菜ちゃんをおんぶする絵実梨さんの祖母の菅田由美子さん（右）＝岐阜県関市で



「結愛菜（あいな）、こっちよ」。居間で手押し車を押してよちよち歩きする娘を見て、母の成木絵実梨（なるきえみり）さん（20）は笑顔になった。

結愛菜ちゃんは生後10カ月。ミルクをよく飲み、離乳食をよく食べる。体重は標準より大きめの約10キロ。伝い歩きで、部屋中を動き回るようになった。そんな娘の成長が、絵実梨さんはたまらなくうれしい。

でも、左足が不自由なため、重くなった娘を抱っこしてあやすのはもう無理だ。夫の健司さん（30）と両親は働きに出ているため、日中は同居する祖母、菅田（すがた）由美子

さん（63）を頼る。

「結愛菜が眠いみたい」。7月の平日の昼すぎ、絵実梨さんは携帯電話で祖母を呼び出した。祖父母は、同じ敷地内にある工場を切り盛りしている。数分後、2人が日中を過ごす2階に、由美子さんが顔を出した。

「よしよし」。眠れなくてぐずぐずする結愛菜ちゃんを、由美子さんはおんぶして背中を  
とんとたたきながら歩き続けた。結愛菜ちゃんはすぐに泣きやみ、静かな寝息をたて始  
めた。

お風呂と夜の寝かしつけは、健司さんの担当。健司さんがベビーバスで結愛菜ちゃん  
の体を洗い、絵実梨さんは脱衣所で健司さんとともに服を着せる。健司さんが残業で帰  
りが遅い日は、父の英和さん（45）が風呂に入れる。

絵実梨さんはほぼ1日を、娘と家の中で過ごす。抱っこして歩けないし、車は運転で  
きるものの、自分1人でチャイルドシートに乗せ降ろしするのは到底無理だからだ。同  
じゼロ歳児のいる友達に自宅に来てもらい、一緒に遊ぶのが大切な時間だ。

ただ、家の中でも、抱いていた結愛菜ちゃんを、床に落としてしまったことが数回  
ある。けががなかったのは幸いだったが、そんなことがあって、健司さんは「2人きりで  
家にいるのも心配なんです」とぼつり。

子どもには大切な外遊びや日光浴も、結愛菜ちゃんに体験させるのは難しい。「他  
のお母さんは子どもを公園に連れて行っているのに、私には無理なの」。安全を第一に  
考えると、あきらめざるをえないのだ。子育てへの焦りと、自分自身の体への悔しさが  
胸に募る。

頻繁にある健診や予防接種のため外出が必要なときは、夫が会社を休んだり、由美  
子さんに付き添ってもらったりしている。「もうすぐ、結愛菜は歩きだす。そのとき、  
どう面倒を見ればいいのか」。成長とともに、絵実梨さんの不安は増す。

体の具合が悪いなどして、親が小さな子どもの面倒を見られないケースは、どん  
な人にもありうる。私に使えるサービスが行政にないのかな。絵実梨さんが、居住す  
る岐阜県関市に電話し、手助けしてもらえない方法がないか確かめたところ、移動  
や育児で有償ボランティアに手伝ってもらえるファミリー・サポート・センター事  
業があると教えてくれた。「これで、児童館などに連れて行ってあげられる」。少  
しほっとした。

これからも、壁にぶち当たるかもしれないけれど、何とかなると感じ始めている。  
「将来、お友達から『結愛菜ちゃんのお母さんの歩き方はちょっとおかしいね』と  
言われるときがくると思う」。そこまで、娘をしっかり育てられそうな自信が芽生  
え始めた。（稲熊美樹）

## <地域支えて>材料厳選 味に自信

河北新報 2015年11月16日



### クッキーの生地模様を付ける従業員

◎「みやぎ社会貢献大賞」歴代受賞団体（5）麦の会（仙台市宮城野区）

障害のある人もない人も、一緒に働ける場を目指してNPO法人「麦の会」が仙台市宮城野区松岡町で運営するパンとクッキーの店「コッペ」。クッキーが焼き上がると、厨房（ちゅうぼう）に甘い香りが広がった。

従業員は障害者17人、健常者8人。調理や後片付け、製品の袋詰め、配達と役割を分担して作業に当たる。コッペで働いて20年ほどになる宮城県富谷町の明石澄子さん（49）は「イベントでの出張販売や配達でお客様と接するのが楽しい」と充実した毎日を送る。

麦の会代表理事の飯嶋茂さん（52）は「従業員はそれぞれのペースで得意な作業を見つけ、習熟していく。いないと困る人ばかりだ」と目を細める。

パンはどっしりとした食感、クッキーは甘さ控えめの素朴な風味が人気。東北産の小麦粉を調達し、抗生物質を一切含まない飼料で育てたニワトリの卵を取り寄せるなど材料にも吟味を重ねる。

コッペのオープンは1988年。いまでは従業員が近くの食堂から昼食に招かれるなど、地元住民との交流も深まっている。

障害のある従業員の賃金は月平均で約5万円。県内の平均賃金（14年度）の1万81



85円を大きく上回る。

「従業員の自立に向け、さらなる賃金アップを目指したい」と飯嶋さん。平均7万円を目標に掲げ、新たな販路の開拓やイベントへの出店増で売り上げの向上策に取り組んでいる。

<メモ> 2010年度受賞。営業は月一金曜の午前10時～午後4時。パンは約30種、クッキーは16種を製造、販売している。連絡先は022(299)1279。

## 太宰府参拝、歴史感じる 希望号福岡到着 「梅ヶ枝餅」に舌鼓



茨城新聞 2015年11月16日

梅ヶ枝餅を頬張る参加者=福岡県・太宰府天満宮

障害のある人たちに旅行を楽しんでもらう「第16回希望号」(茨城新聞社、茨城新聞文化福祉事業団主催)は15日、福岡県に到着、太宰府天満宮を参拝した。穏やかな秋晴れの中、一行は国の重要文化財に指定される風格ある本殿を参拝し、歴史を肌で感じた。

障害者と家族、ボランティアなど計105人は同日午前羽田空港を出発、午後2時すぎに福岡市内に入った。太宰府天満宮には1時間ほど滞在。本殿を参拝した後、思い思いに表参道を散策して楽しんだ。天満宮名物で中にあんが入った焼き餅「梅ヶ枝餅」を買い求める姿が多く見られ、参加者は焼き立てを頬張った。土浦市から参加した土屋めぐみさん(29)は「参拝できてよかった。餅もおいしかった」と満足そうだった。

一行は同日夜、長崎県佐世保市のハウステンボス内のホテルに到着した。(成田愛)

## <社説>高齢者再犯増加 社会で孤立防ぐ取り組みを 琉球新報 2015年11月16日

2014年に刑務所に入った2万1866人のうち65歳以上の高齢者は2283人で、統計を取り始めた1991年以降初めて1割を超えたことが15年版犯罪白書で明らかになった。高齢者は再犯率が高く、出所後に住居や仕事がないため犯罪を繰り返して服役期間が長期化するなど、刑務所が「福祉施設化」していることがあらためて裏付けられた。犯罪抑止という側面にとどまらず、福祉、医療的な支援の必要性が問われている。

高齢者の大半の犯罪は窃盗で、しかも手口のほとんどは万引が占めている。高齢者の入所は91年には274人で全体の1.3%にとどまっていたが、その後毎年ほぼ増加している。14年の男女別の高齢者率をみると、男性が9.8%なのに対し、女性は16.4%と高く、女性は09年以降、1割以上で推移している。

高齢者の女性は男性と比べて家族関係などが保たれている割合が高い。しかしその家族関係がいったん壊れると、犯罪へと走ってしまう傾向にあるようだ。

白書によれば女性高齢者は「近親者の病気・死去」を背景事情に持つ者が窃盗再犯率が高くなっている。こうした理由から「配偶者の死去や病気の看護等に伴うストレスといった要因が再犯につながっている可能性もあると解釈し得る」と分析している。

このため女性高齢者が起訴猶予処分などで釈放されたら、親族がいない場合は更生保護施設や自治体、社会福祉機関への橋渡しが重要となっている。現在、保護観察所が検察の依頼に基づき、釈放後に福祉サービスを受け、住居を確保するため、関係機関と調整する社会復帰支援策の試行的な取り組みを一部地域で実施している。さらに拡充して実施してほしい。

現在、服役者に対する再犯抑止のプログラムは窃盗事犯に対する特有のものはないという。白書では女性高齢者について「加齢に伴う心身の不調等を始めとする高齢期の不安等が遠因となって万引きに至る」と分析しており、篤志面接や外部講師の講話などプログラ

ム内容の充実化の必要性を説いている。ぜひ取り組んでほしい。

こうした取り組みにとどまらず、高齢者を孤立させない施策なども必要だ。犯罪の矯正機関だけでなく社会全体で問題解決に取り組む必要がある。

#### 社説：老人ホーム処分 問題施設の早期把握に努めよ 読売新聞 2015年11月16日

高齢者やその家族の安全と安心をないがしろにした経営体質が露呈したと言えよう。

川崎市内の有料老人ホーム「Sアミーユ川崎幸町」で入居者3人が相次いで転落死したことなどを受け、川崎市はホーム側に対し、行政処分を行うと通知した。

弁明を聞いた上で、早ければ来年2月から3か月間、市への介護報酬請求を停止する。

このホームでは、昨年11～12月に、80～90歳代の入居者3人がベランダから転落して死亡した。

80歳代の女性入居者が、職員4人に頭をたたかれるなどの虐待を受けていたことも発覚した。男性職員が入居者の金品を盗む事件も発生している。

あまりにずさんな管理体制である。川崎市の処分は当然だ。

大阪府や千葉県などにある系列の施設でも、職員による入居者虐待や転落死が判明している。

一連の重大トラブルの教訓が、施設間で共有されなかったのは問題だ。厚生労働省は親会社「メッセージ」に業務改善勧告を出した。再発防止へ向けて、職員の教育と管理を徹底してもらいたい。

憂慮すべきは、こうしたサービスの質の低下が「メッセージ」傘下の施設に限らないことだ。

有料老人ホームを含めた介護施設では、虐待などの重大トラブルが後を絶たない。

厚労省によると、施設職員による虐待の相談・通報件数が、2013年度は962件に上り、前年度より3割増えた。暴力や身体拘束、暴言のほか、必要な介護をせずに放置する事例も目立つ。

背景として、施設の急増に伴う深刻な人手不足が指摘される。

介護保険の導入後、特に増加が著しいのが有料老人ホームだ。14年には9581施設と、10年前の約10倍になった。建設業など異業種からの参入も相次ぐ。

一方、介護職は「低賃金で重労働」との印象が強く、人材確保が追いつかない。経験の浅い職員に頼らざるを得ないのが現状だ。

認知症など専門的ケアを要する高齢者が増えている。職員の心身の負担は過重になりがちだ。

職員の介護技術の未熟さやストレスが、事故や虐待の大きな要因とされる。賃上げなどの人材確保策と併せて、職員に対する研修の充実が求められる。政府や自治体は積極的に支援すべきだ。

行政の指導・監督の強化も重要だ。高齢者虐待などの相談窓口を住民に周知し、問題施設の早期把握に努めることが有効だろう。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行